

マルチレベル分析による アクティブ・ラーニング型授業の効果測定 (8) —グループ目標が協同作業認識に及ぼす影響—

○杉本英晴 (駿河台大学)
高比良美詠子 (立正大学)

佐藤友美 (九州工業大学)

キーワード：アクティブ・ラーニング，協同作業認識，マルチレベル分析

問題と目的

教育の質的転換に伴い、大学教育においてもアクティブ・ラーニング型授業の導入が推進され、とりわけグループワークはその教育効果の大きさから積極的に採用される傾向にある。しかし、その教育効果については個人差が大きく (松下・京都大学高等教育研究開発推進センター, 2015)、グループワークがいかなる条件でどのような教育効果をもたらすのか、詳細な検討が必要である。

そこで杉本他 (2016) は、実習科目の中で行われるグループワーク活動が汎用的態度の 1 つである協同作業認識 (長濱他, 2009) に及ぼす影響を検討した。その結果、授業内において発言活動が多い学生ほど仲間とともに作業する有効性を低く認識し、協同活動が多い学生ほどその有効性を高く認識していた。他方、集団レベルのグループ活動が個人の協同作業認識に及ぼす影響は確認されなかった。

ただし、アクティブ・ラーニング型授業において集団レベルでの効果を及ぼす要因はさまざまで、所属グループ全体で行われる行動のみならず、所属グループ全体で共有される目標のような認識もグループや個人に影響を及ぼすだろう。このことから本研究では、所属グループでの活動目標に対する認識が協同作業認識に及ぼす影響について、個人レベルと集団レベルの効果を分離できるマルチレベル構造方程式モデリングによって検討する。

方 法

調査対象者 大学 1 年生 199 名 (女性 73 名、男性 126 名) で、4~8 名の固定メンバーから成る 32 グループを対象とした。

調査内容 (1) 協同作業認識：長濱他 (2009) の協同作業認識尺度 (協同効用、個人志向、互惠懸念) を使用した。(2) グループ目標：高比良他 (2019) で作成された所属グループでの活動目標に関する 2 下位尺度 (パフォーマンス目標、メンテナンス目標) を使用した。

手続き (1) は第 1 回授業開始前 (事前) と第 15 回授業終了時 (事後) に、(2) は第 15 回授業終了時に測定した。

結果と考察

グループ目標が協同作業認識 (協同効用、個人志向、互惠懸念) に及ぼす効果を検討するため、Figure 1 の分析モデルを使用した。グループ目標の 2 下位尺度 (パフォーマンス目標、メンテナンス目標) は尺度項目の平均値を用い、級内相関係数はそれぞれ .06 と .14 で

あった。説明変数は、それぞれ全体平均による中心化を行った。

その結果、集団レベル (a~c) では、パス (c) についてのみメンテナンス目標から協同効用への有意な正の効果が得られた。すなわち、メンテナンス目標を共有してグループワークを行っていたグループほど、授業終了時に平均して仲間とともに作業することの有効性を認識するという集団レベルの効果が示された。

個人レベル (f~h) では、一部に有意なパスがみられた。パス (f) については、3 下位尺度全てで有意な正の効果が得られ、事前の協同作業認識が高い人ほど事後の認識も高かった。パス (g) については、互惠懸念に対して有意な負の効果が得られ、パフォーマンス目標を意識してグループワークを行なった人ほど、事後に協同作業による互惠性を強く認識することが示された。パス (h) については、協同効用に対して有意な正の効果が得られ、メンテナンス目標を意識してグループワークを行なった人ほど、事後に仲間とともに作業することの有効性を認識することが示された。

さらに、変量効果 (d, e) については、協同効用にのみパス (d) における有意傾向の負の効果が、パス (e) における有意の正の効果が得られた。すなわち、事前に仲間とともに作業することの有効性を認識している人ほど、事後もその有効性を高く認識するという協同効用におけるパス (f) の効果は、パフォーマンス目標が共有されているグループほど弱まり、メンテナンス目標が共有されているグループほど強まること

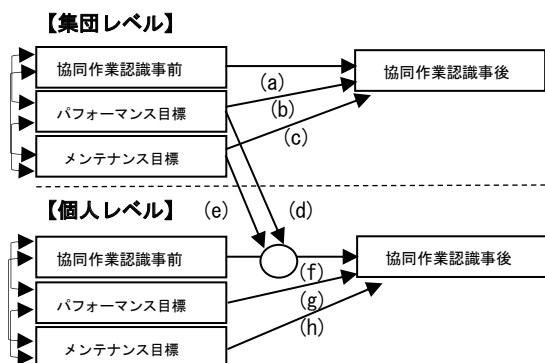


Figure 1 分析モデル (誤差項は省略)。